慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	犬 : Der Hund als Esau in seinem Fell
Sub Title	"The Dog" (2)
Author	塚越, 敏(Tsukakoshi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.13, (1961. 12) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00130001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

犬

—Der Hund als Esau in seinem Fell—

塚越　敏

二

一九〇七年七月三十一日に完成された『犬』という詩の後半部は、すでに書きあげられていた散文『ある出会い』[註1]のなかで、犬（芸術家）と孤独者との出会いの描写によって裏打ちされていた。この出会いは犬（芸術家）と人間（孤独者としての人間）との稀にみる一瞬の出来事なのである。意識的人間の像世界である都会から離れた孤独の道で、この出会いは初めて成立する（この道のうえでは人間的な das man に出会わぬことが条件になっている）すでにこの男は孤独のゆえに意識的人間の像世界からは異質（fremd）のものとなっている。原文では、この男をまず見知らぬ男（der Fremde）と呼んでいる。突然、われわれの内部にふとなにかが思い泛ぶように、この道に犬の姿が泛びあがる。犬は自分の務めから正確に視線を向けて、その男をひきとめようとする。出会いの瞬間はまもなくである。犬は認識の徴しとして自分の真実の顔を差しだしている。一度は両者の眼が出会いそうになったが、会わなかった。それは犬にとってほんの些細な（Kleinigkeit）ことに思えたのだが、孤独の途上にあるその男には些細なことではなかった。両者の眼がぴっ

たり出会ったのは次の瞬間であった。その瞬間とほとんど同時に、たちまち犬は「あなたのためなら喜んでなんでもいたします（ich möchte alles für dich tun）」と告白してしまう。

註1　オランダの国際的ゲルマニストであるヘルマン・マイヤーは「美学および一般芸術学年鑑」第二巻に『リルケのセザンヌ体験』という論文を発表しているが、その付録として問題の『犬』という詩の解釈をおこなっている（Herman Meyer: "Rilkes Cézanne-Erlebnis", Jahrbuch für Aesthetik und Allgemeine Kunstwissenschaft Band II 1952—1954, Enke Verlag, Stuttgart. S. 69—102）その解釈は大体において当をえているが、詩のなかの「自分の顔を差しだす」ということと「哀願せんばかりに」という言葉にたいする解釈は全然なされていない。従ってマイヤーは、この詩における最後の接続法を間接話法となし、犬は「自分は存在しない」ということを意識しながら断念するのだ（S. 99）という解釈上の誤謬に陥入ってしまっている。「自分の顔を差しだす」と「哀願せんばかりに」は像世界との和解を望むからであるが、「人生と芸術の間には敵意がある」（鎮魂歌）ゆえ、結局は断念してしまうのであって、もし和解（原文では理解—それも結局は妥協となる—）が成立するなら、犬は本来的に存在しなくなるのである。マイヤーのこうした誤謬も（犬の完成をうながした）『肖像』とこの散文『ある出会い』を無視した結果に由来するといわねばならない。この『出会い』は犬（芸術家）と人間（孤独者としての）との稀にみる理解（出会い）の一瞬と危険を描いたものである。

この散文『ある出会い』（Eine Begegnung）は『犬』の詩ができあがった二カ月まえの一九〇七年五月十八日発表のもので、この散文の書かれたのはその年の一月、カプリ島である。

この告白は意識的像世界にのみ通用するもので、無言のうちに人間との理解が成立したと思った瞬間、この告白を口にすることによって像世界に転落したのであった。すなわち本来的に存在しなくなってしまったのだ。もともと本来的・非日常的でありながら、ややもすれば非本来的・日常的像世界に安住しがちな犬、一方の孤独者はいま非本来的・日常的像世界から、本来的・非日常的世界へと歩みをつづけている。そうした孤独者といえども非本来的日常への転落という危険のうちにある。生を真に生きてゆくこと、それはこのような孤独者であることを意味し、それはまた絶えず危険のうえにあって、護られていないということである。[註1] 犬の眼は意図することなく、不思議と不確に非日常的に働き、その眼の高まりゆく観察によって、その見知らぬ孤独者が非日常的に自分を理解してくれるものと信じこむ。だがこの理解しあう出会いの一瞬の後に、犬はあまりにも性急に日常的喜びを表わして転落してしまった。孤独者はすっかり狼狽して、素知らぬ顔で歩いてゆく、その男の動作はあくまでも、意識的ならぬ「機械的」である。男はもはや意識的に（日常

的に、非本来的に）犬との係わりをもとうとしない、そうした係わりによって犬を像世界にひき戻すことを恐れている、すなわち像世界における犬の存在には責任がもてないからである。

註1　危険のうえにあって護られていない—これは後年の一九二四年六月四日の即興詩『自然が生物たちを……』(Wie die Natur die Wesen……)のなかで、人間存在の問題に関して表現されている。従ってわれわれはこの即興詩の萌芽がすでにこのころに現れていることを知るのである。

犬は日常的に無器用な歩き方で孤独者の後を追い、日常的な振舞いをみせて、その孤独者をひきとめようとし、ついには非日常的な、もっとも事物的な事物、すなわち石[註1]さえも口に銜えてみせる。そうまでもして犬は再会の一瞬をもとめている。仕方なく孤独者は犬にたいして「理性的で」あることを要求し、名前の通用しない、言葉の通じない事物世界において出会の一瞬があると洩らすや、犬は本来的なわれに帰ることができた。犬は表面の偽装の無意味を知って、「苦しみにひきつった口」でそのおなじ石を銜えることに成功した。そのとき銜えられた石は本来の重みと堅さをもった石にかわっていた。こうして犬は非日常的な本来の事物世界の事物と係わりあったのである。ここに再会の一瞬が訪れたのである。しかし再会の一瞬を阻げようとするもの（意識作用）が人間には生まれつきあるものだといわれてみれば、犬はひきとめることの無意味を知るのである。もし犬が本来的に Da-sein に係わる動物的存在者でとどまっているならば、男はなにもいわないだろうし、再会の瞬間も許されよう。男は意識的な像世界に生をもちながらも、孤独なるがゆえに Da-sein に触れうる一瞬が許されたのであって、その瞬間（両者の視線の一致した瞬間）に犬ははじめて人間の理解をえたのであった。人間の意識的世界に住みついた犬は、すべてを鈍らす日常的像世界に頼らず、また頼ることによって生ずる責任を人間に負わすことなく、あくまでも孤独で、本来的に動物的な存在者であることが必要である。また人間は孤独になったときにのみ、名前も言葉も通用しない一瞬に犬（本来的・動物的存在者としての犬）との交通（Kommunikation）が許される——この交通が両者間の認識であり、理解である。両者のいずれかその一方が本来性を失った場合には、この交通は破れてしまう。もし犬が事物世界を自分の本来的故郷としている場合には、像世界における人間なぞに犬を助けることも、死なせてやることもできないのである。またもし犬がその事物世界を捨てさった場合には、犬の存在にたいし本来的には責任をもちえないのであるから、そうした犬に向ってただ「去りたまえ！」(Geh!) と呼びかけてやらねばならない——これが犬（芸術家）に対する理解である、すなわち、事物世界に孤独のままにあらしめる

ことである。

註1　犬が日常的な振舞いのうちに、もっとも事物的な石と係わりあうこと—ここでリルケははっきりと芸術家としてのあるまじき行為を表現している。その場合、芸術家は本来的な自己をひどく抑制して（Selbstüberwindung）あたかも生命の通ったものと係わっているかのごとき錯覚を人間（大衆）に呼びおこしているが、それは軽卒な芸術家の振舞いにすぎないのである。従ってそうした芸術家が非日常的本来の姿にたち帰ったとき、その石は石本来の重みを獲得し、はじめて芸術物が芸術家の孤独から生みだされるのである。—この散文『ある出会い』の読者は、犬を芸術家と看做し、見知らぬ男を孤独に生きる目覚めた大衆のひとりとして考え、芸術家自身のあるべき状態と、それに対するわれわれの責任ある態度とを読みとらねばならない、また同時に存在の問題にも十分な注意を払わねばならない。

こう呼びかけると、見知らぬ男は落ちついた気持になって、こう考えた——もし犬に対して、こんな態度をしなかったら、どんな会話が交わされ、どんな別れ方をしたことだろう？　いうまでもなく日常的な会話と握手が交わされたことであろうし、たんなる妥協のうえで犬を像世界に居坐わらせてしまったことだろう。「去りたまえ！」——これは犬に対する理解ある要求であり、それはまた犬への協力なのである。[註1] こう要求できるのも、その男が孤独の道のうえにいるからで、もしそうでないなら、もちろんあの出会いの瞬間もなく、ただ犬を意識的像世界に飼い馴らすことによって転落せしめ、またもしそれに甘んじたら最後、それは犬（芸術家）の死である。しかし芸術家はこの像世界の現実から離れることができない、地上の像を事物化することが芸術家の使命であるからだ。いなむしろ像世界の現実に、積極的であらねばならない。だがそこには自分自身意識的になるという危険と周囲の無理解という危険がある——それゆえリルケは芸術作品を「危険のなかにあったことの結果」だという。要するに、意識的人間には芸術家もその作品も理解できないし（とくに二十世紀の文学・芸術の領域において）一方また意識的構成の像世界にたいし意識的になろうとする芸術家の危険がある——ただ両者が孤独になることによって、従って Da-sein に係わることによって両者の間に理解ある認識が成立する。この散文における言葉なき認識の一瞬、出会いの一瞬、それは芸術に関しては孤独者と芸術家の相互認識の一瞬であり、存在に関しては相互主体性の確立の一瞬である。いったいこの一瞬はどこに起ったのか？いうまでもなく事物的世界においてであり、この一瞬に言葉なく開かれる Da-sein こそ、実は後年におけるオルフォイス的世界なのである。

註1　モーリス・ベッツは自著『フランスにおけるリルケ』(Maurice Betz: Rilke in Frankreich, H. Reichner Verlag 1937) の一六三頁（フラン

ス版一七八頁）にリルケの談話を引用している―「犬は私たちのさまざまな関係の世界にすっかり惹きつけられてしまって、私たちが協力してやらなければ、犬は自分の道を拓いてゆくことができないのです。私たちが自由に開放されている動物の眼に発見するあの無関心、あの驚くべき本能の深みは、犬にはまったく失われているのです……犬は犬たることをやめたと感ずるや、餌を拒絶し、数日後には墓の傍に、あるいは犬小舎のなかで死ぬのです、人間の誇りにすっかり毒されて」

このように芸術の問題をとおして Da-sein を経験したリルケは、芸術家という特殊な人間考察と芸術創造の問題と、また同時に一般の意識的人間と意識的現実（像世界）と存在との関係を考察するのである。つまり喜びや悲しみや、幸福や不幸をもつ現実に生きている人間は、その現実と絶対的な関係を結んでいるが、孤独者のみが孤独によって（すなわち、実存することによって）現実の虚構を知って、それを突破して Da-sein に触れ、そこに故郷を発見するのである。しかし一般にはわれわれの現実が故郷とされている、だがそれは像世界であり、偽りの故郷である。ではわれわれには孤独を通して以外には故郷を発見しえないのであろうか？　われわれが子供の世界を顧みるとき、かってわれわれが故郷（事物世界、自然）に遊んでいたことが思いだされてくる。たしかにわれわれは幼年時代に Da-sein と純粋に係わっていたのである。だがまもなく（意識的な）教育などという処世術で、われわれは幼年時代の事物世界から引きだされ、意識作用によってますます離反の状態におかれ、ついには Da-sein の開けていた事物世界を喪失した状況におかれてしまった。ここからしてリルケは像世界の現実を故郷とする人間とその現実との関係から、Da-sein を故郷となしうる人間のその Da-sein との関係へと問題を移してゆく。芸術的行為（熟視と孤独）によって Da-sein に触れうることを知ったリルケは、人間の意識作用によって失われた Da-sein の取戻しを要請する。リルケはまた犬に対しても、人間とおなじ故郷喪失者としての犬の Da-sein の取戻しを要請する。リルケの中期以後に描かれている犬は、たんに芸術家としての犬ではなく、一般の故郷喪失者としての犬である。しかしこうした犬の故郷喪失の状態はすでにはやくからリルケ的意味において観察されていた。

註1　『新詩集』のなかに『幼年時代』という詩がある。一九〇六年七月一日に成立しているから『犬』の詩のほぼ一年まえの詩である。事物や獣の身に起る事象が子供の身にも起っていたこと、子供の生活は出会いと再会と前進に充ちていて、事物や獣とおなじ生を営み、形象（フィグール）（相対的な像（ビルト）でなく、絶対的な形象）に充ち溢れていたこと、だがやがて織物の一本の糸のように人生という織物模様の連続（Bilder-Folgen）のなかに縫いこまれ、そこにとどまることによって混乱してしまったことが描かれている。つまり幼年時代の姿とその喪失とその後の像世界におけるわれわれの混乱が歌われている。リルケ文学にはしばしば幼年時代が歌われているが、それはすべてこの意味でいわれている。われわれがかって出

会いと再会と前進によって停滞しなかったこと、純粋に絶対的な形象と係わっていたとーこの点からリルケは幼年時代をわれわれ像世界に住む人間の唯一の財宝とみなしているがーこの二点は後年、前者は『ドゥイノの悲歌』で、後者は『オルフォイスへのソネット』で、「開けた世界」に関して歌われている。

リルケの犬への関心は、ごく初期から、人間と犬との関連においてはっきりと現われていた――「一匹の動物を自分に馴れさせ、いわば親交を結ぶよう説得するなど、いつも不正なことを犯しているように思われる。動物のほうは次第に信頼するようになるが、いざなにかしら動物に不自由なことでも起れば、すぐさま私たちは動物の信頼感を傷つけてしまうことになる。動物の悩んでいる理由や動物の希望の意味を理解することなど私たちにはできないからだ。私たちは動物たちになにを与えることができよう？　私たちには動物を引きよせ、私たちの習慣で甘やかしてしまうことができるくらいで、動物の身に起る重大なことに加わることも、援助してやることもできないのだ。実際、友人か兄弟かのようになって、誰が自分の好きな動物の運命をともに分けあうことができよう？　私たちは一種の責めを負うてしまっている…」[註1] これは一九〇一年十二月一日付の日記の一部であるが、その当時は、事物が本来的に捉らえられ、リルケ的意味をもちはじめていた頃で、芸術の問題に関連して孤独の問題[註2]が強調されていた頃である。日記で云われている動物は芸術家としての犬というよりは、動物性を失って人間の意識的世界に迷いこんでしまった犬である。人間は犬の主たるべく犬を人間の意識的像世界に隷属せしめ、犬の故郷を喪失せしめている。これに反しリルケは犬を純粋に動物的存在者のままにせしめておくために、孤独を要求し、失われた故郷を取戻してやろうと努めたのであった。要するに、Da-sein に係わる事物世界が犬の故郷として問われねばならなかった。しかし犬がときとして故郷にたち帰り、純粋にその動物性を取り戻すことを知ったとき、また芸術家が事物世界を本来的に自己の故郷となしうることを知ったとき――それは芸術家の問題が大きく取りあげられていたパリ時代であったが――犬は芸術家の譬えとして描かれた。しかしその譬えの基盤は Da-sein に係わる事物世界であるがゆえに、芸術家の問題としてでなく、われわれは故郷喪失者としての犬の姿を事物世界や人間の像世界との関連のうちにみることができる。

註1　「初期の日記」（Tagebücher aus der Frühzeit, Insel-Verlag 1942）の四一一頁。

註2　「愛と友情は孤独への絶えざる機会を与えるためにあるもので、ただその機会を与えることだけが実際の共同生活です」（パウラ・ベッカー宛、一九〇二年二月十二日）という手紙の一節からもわかるように、リルケは動物をも、人間をも事物とおなじように、本来的に即物的にみようと

し、動物への愛と友情も、動物を人間の意識的世界に馴れさせるためのものではなく、動物も人間も孤独によって共同生活を送るべきだと考えていた。

日常的世界に住みついてしまった犬に対して懐くリルケの苦悩は、先にみた『ある出会い』のなかで「おまえの性質は私の性質に従おうとしているが、結局はそのとき私の引受けられない責任が生じてしまうのだ。おまえの信頼がすっかり私のうえにかかっているのだということを、おまえはけっして気付きはしないだろう。おまえは私を買かぶりすぎているし、私にはできぬことを私から期待しているのだろう。おまえは私を観察し、良くもないことを是認してしまうのだろう」と表現されている。このように人間を信頼しきっている犬に対してリルケは当惑し、その責任を感じて苦悩したのであった。結局は犬を孤独に去らしめることが、義務でもあり、責任でもあり、また犬を救いうる唯一の犬への協力でもあった。

このようにリルケは、犬の問題を、芸術家の問題としてばかりでなく、同時に存在の問題としても採りあげていたが、後者の場合には当然のこととして生と死[註1]の問題がとりあげられねばならなかった。

註1　われわれは生と死を切り離して、死を恐ろしいものとして追いやってしまったが、これは相対化する人間意識が生と死を対立的なものとしたからである。かくしてまた未来に襲いくる「死への存在」(Sein zum Tode) と考え、現にいま「死にかかわる存在」(Sein zum Tode) と考えることをしないのも、それが意識的に計算される日常的時間に由来しているからである。胎児のときすでにわれわれは生と死を同時にもち、次の幼年時代にも生と死を分けずにいた、それはちょうど果実の果肉と核との関係のように同時に成長していた。ハイデッガーの『存在と時間』(第二篇、第一章「現存在の可能的全体存在と死への存在」) によれば—「誰も他人からその死を取り除くことはできない」他人の死は私の生を証明するが、他人の死を代理することはできない。死は本質的につねに「私のもの」である。未来のいつか「私のもの」となるのではなく、現に固有のものなのである。これが存在論的意味では、死に向って自らを投げかけることによって、死は本来的な可能性として、死の完全な意味は把握される。ここからして自らを「死へ投げかける存在」(Sein zum Tode) が、すなわち「死にかかわる存在」が理解される。このことをリルケはすでに、ハイデッガーとは関係なく、「自己自身の死」として表現していた。日常的には未来に属するものとされている死が、現にいま固有のものとして存在者に属するところから、意識的像世界における日常的時間は、死と生を相対化しうるが、事物世界においては通しない、脱落したものと解せられうるのである。事物世界に通じている芸術家には日常的時間は意味をもたない。リルケは後年にいたって、「意識のピラッド」で、また『ドゥイノの悲歌』を解説した書簡で「時間の脱落」が存在者の存在に必要な条件としている——「あのより広大な『開けた世界』にすべては存在するのです。同時にとはいえません、なぜならすべてが存在するためには時間の脱落こそその条件だからで

す」(An Witold von Hulewicz, 13. Nov. 1925) この『開けた世界』とは事物世界の後期における名称である。

事物世界を故郷としている犬（動物）には時間の概念がない。従って死の不安に襲われることもないし、生と死を区別（相対化）することもしていない。リルケ的立場からすれば、動物は生と死を同時に生きているものとされ、「意識のピラミッド」（一九二四年の書簡）にみられるように、生者と交わるのと同様に死者とも交わることができるのであろう。リルケはすでに死者と犬との交わりを『マルテ』のなかで描いている。死んだインゲボルクを迎えにいく犬の様子――犬にはインゲボルクがやってくるのが見えた、インゲボルクが生きていたときとおなじように、犬はインゲボルクのそばにいったらしく、ぐるぐる跳ねまわり、その娘を舐めようとして跳びまわり、くんくんと鼻をならした。まるで跳びまわる犬のかげになってインゲボルクの姿が見えないようにさえ思えた。この犬と死者との交わりは、後年にいたって人間と死者との交わりにまで発展する。いうまでもなく、その交わりは意識的な、生と死の対立した人間の像世界においてではなく、事物世界における事象（Ereignis）としての交わりである。

しかしこうした交わりをもちうる犬も、あまりにも日常性に馴れ親しんだ結果、意識的像世界におかれ、死に不安を覚えることさえもある。重い病気に罹かったマルテの犬が死の闖入を知ったとき、犬は意外な目つきをして、マルテがその死を闖入せしめたことを責めるのであった、犬はマルテが阻んでくれるものと信じていた。犬は意外な面持ちで死んだ。しかし犬の眼は別れを告げる眼ではなかった。犬は闖入してきた意外な終末としての死を意識したのだ、いや、意識するよう像世界で仕向けられてしまっていたのだった。死を阻むこともできないのに、そう仕向けたマルテ（人間）の無責任さを、その犬は責めたのである。人間は犬をひき寄せておきながら、なんの責任ももてなかったのである。犬の眼が別れを告げる眼でなかったというのは、本来的には生と死の区別をもたない事物世界に所属していることを表わしているのである（参照―『新詩集』の『恋人の死』）。

このように意識的像世界に犬をひき入れておきながら、死なせることもできない人間にリルケは烈しい苦痛を覚えたことはたしかで、このことが一九一二年二月八日の某嬢宛の手紙のなかで、事実として語られている――ピエロという犬の果しない事物世界への郷愁を救いようもなく見つめる苦痛、といってわが身をその犠牲にもできない苦悩、迎えいれる天国ももたない魂をもたせてやるだけの苦しみ、たとえ自分の心を割いて犬菓子として与えてやっても、自分の職を捨て、犬の慰藉に日を送っても、まるで当のない結果にす

ぎない。このような中間的な存在者となってしまった犬を、ふたたび事物世界に戻してやることの不可能にますますリルケは苦痛を覚えたのであった。

しかしまたリルケはスペインのコルドバで一匹の醜いお産もま近かな牝犬の眼に事物世界との係わりを経験した。その牝犬がリルケのほうにやってきて「憂いと誠実のために大きく見開いた眼をあげて、私の眼差しを求めました。その眼には個々のものを乗り越えて、どこへだかわかりませんが、まあ未来のなかへか、不可解な世界のなかへか、そのなかに入っていく一切のものがあったのです。それが消えると、その牝犬は私のコーヒーの角砂糖をひとつ分けてもらったのでしたが、それはごくついでのことで、いわば私たちは一緒にミサを挙げたのでした。その行為は授与と受領にすぎなかったのです。しかし（その行為の）意味と厳粛さと私たちの完全な了解は無限なものでした。とにかくこうしたこともただ地上においてのみ起りうることなのです」[註1] これはかってのあの『ある出会い』における一瞬である。かってその出会いにおける主人公は、再会の一瞬を望むべくもなく、ただ犬を去らしめたが、いまは犬を去らしめることなく、犬と一緒にミサを挙げることができたのである。このミサは、いうまでもなくその貴重な一瞬に捧げられたのである。それはたった一個の角砂糖の授与と受領にすぎない行為ではあったが、その意味と厳粛さは無限であり、また犬との完全な了解も無限であった。こうしてこそ私たちは「この地上で不思議と素晴しい状態にたいする心構えができるのでしょう」[註2] この「素晴しい状態」とは事物世界との永続的な係りあいの状態、そこに Da-sein と触れあう状態、すなわち後に展開されるオルフォイス的世界に生きる可能性の状態である。

註1　マリー侯爵夫人宛、一九二二年十二月十七日の書簡

註2　侯爵夫人は自著『リルケの思い出』(Erinnerungen an R. M. Rilke, Oldenbourg Verlag 1932) で、この夫人宛の手紙を引用し、その直後（六十八頁）に、これは詩人の Sursum corda――心を挙げて、主を仰げ（カトリックのミサ序唱の一句）――としているが、おそらくこの「素晴しい状態」(göttliche Verhältnisse) をキリスト教的意味での神的な状態に解したのであろう。なお引用された手紙は、リルケが反キリスト教的態度を表明した有名な「コルドバ書簡」である。

このようにリルケはもはや犬を芸術家としての犬とみることもなくなり、「死から解放され」事物世界を故郷とし、「開けた世界」をみている動物（『第八悲歌』）たちのあいだに戻し、失われた動物性をふたたびもたせ、犬を本来の犬たらしめることに責任を感じつ

づけた。一匹の犬を理解し、犬の内部に入り、無時間的な瞬間をもつことによって、地上的な最高の至福を、[註1] すなわちあのオルフォイス的世界を垣間みたのだった。しかしこのころ（一九一四年初頭）はまだ、リルケのほうから犬を理解し、犬の内部に入ろうとしており、愛を懐くことによって犬を理解しえないという不可能に悩んでいた。一九一〇年『マルテの手記』を書きあげてから一九一四年までのリルケは不作の時代に苦悩していたのであった。その苦悩の原因ともいうべきものは愛の苦悩であった。リルケが愛の問題を詩に歌い、散文に手紙に書き記すとき、それは愛の在り方を示すばかりで、『マルテ』の最後では愛することの不可能を説いていた。要するに『マルテ』は方向を指し示すことで結ばれてしまい、この点からすれば未完の作品といって差しつかえない。その未完の部分をリルケは自らの生活において担い、苦しみ、悩んだのであった。愛することができなければならない、しかしそれが不可能であったがゆえに彼の創作はほとんど停滞してしまった。しかしなぜリルケには愛することができなかったのだろう、それはリルケがあまりにも事物（的存在）の問題に終始した結果であるといいうるだろう。つまりこの結論は一九一四年六月二十日のルー宛の手紙に[註2]記された『転向』という詩から引きだされるのである。その詩のなかでリルケはこう告白している――自分の内部には「見る男」がいて、その奥底でなにかを願っている。その男はひとりの少女をとらえておきながら、まだ愛したことがなかった。つまり愛が欠けていたのだ。見ることには限界があり、見られたものは愛のなかで栄えたいと願っている。もはや眼の仕事はなされた、心の仕事をせねばならない。すなわちリルケは心で愛し、生を受け入れようとしはじめたのであった。リルケは『マルテ』のなかで生を否定し、生の凹形鋳型をつくった。こうしてその鋳型から肯定的な生を鋳造することを読者に委ね、その際には愛の指示だけを与えておいた。いまリルケはこの愛によって自身から肯定的な生の姿を造りあげることができるようになった。しかしこの積極的な愛の仕事も、それから六週間後に起った世界第一次大戦によって、はっきりと作品に表現して私たちにほとんど示していない。

註1　『リルケとベンヴェヌータ』(Rilkeund Benvenuta, Andermann Verlag, Wien 1947) 百五十頁参照。

註2　ルー宛のこの手紙のなかで、リルケは、かならずやってこなければならぬ転向であるとか、奇妙な詩ができあがったとかいって、この詩『転向』をその手紙に書きつけている。『マルテ』の結末からすれば必ずやってこねばならぬ転向であったろうが、奇妙な詩と名付けているのはなぜであろうか？　しかしいまわれわれは次の事実を知っている――『マルテ』以後のリルケは孤独に烈しい苦悩を覚え次第にみずからの愛の掟を破って女性の愛をもとめるようになった。一九一四年初頭の二カ年半リルケはベンヴェヌータ（本名 Magda von Hattingberg――ピアニス

ト）と恋愛関係にあった。リルケは彼女と結婚さえしようと決意したが、侯爵夫人に諌められた。この事実はルーの耳に達していた。リルケはルーに対してつねに精神的な態度をもって接していたがゆえに、今度の事件の釈明をこの詩で表わそうとしたのかも知れないし、孤独に耐えかねたリルケがむしろすすんで女性の愛をえようとする気持をこの詩で表わそうとしたのかも知れない。それはいままでリルケの言動にとっても、またその言動を知っていたルーにとっても奇妙なことであった。その頃のリルケには男の情欲が燃えさかっていたことは事実であったろう――「彼は自分のめぐりに女性の雰囲気を感じないではいられなかった」という侯爵夫人の証言がある。ベンヴェヌータ体験の後、リルケの愛の庭には Elya Maria Nevar; Liliane (Claire Studer, später Fran von Ivan Goll); Putzi Cassani; Merline (Baladine Klossowska) という女性の姿があらわれる。これら女性とリルケとの関係について、リルケ研究家はリルケ像を汚すまいとして触れたがらないが、十分に研究せねばならい点である。また『転向』という詩も、たんに倫理的、実存的に（ブッデベルク）、美的に（マイヤー）のみ解釈せずに、生活上の事実に基く問題として解釈せねばなるまい。リルケと女性の関係についてはバッサーマンが「別のリルケ」という詳細な論述をおこなっている（Dieter Bassermann: Der andere Rilke）

大戦中のリルケはおおくの女性を愛し、そこに女性の理想像を描いては、理想像をみたしてくれる女性がいなかったゆえに、妄想にふけり、愛することの不可能に悩みつづけたのであった。しかしついにリルケの理想像にかなった女性が現われた――メルリーヌ、すなわち、関秀画家バラディーヌ・クロソウスカであった。最後の愛の女性であったメルリーヌとリルケは燃えあがる情熱のうちに思いがけない愛の祕義を、すなわち愛によって時間を絶した「持続、生の永続、純粋な存在」を知り、リルケは芸術において経験していた変身を、いまや愛においてはじめて経験したのであった。一九二一年二月十一日、リルケはメルリーヌにこう書き送っている――「私たちはむしろ、運命の外にあって、この世ならぬ離脱の状態に絶えずいることができるということ、どこかもはや普通の重力が働かない空間の孤立した場所へなり、ほとんど神のごとき離脱をたえず自分たちに実証することができること、このことはずっと以前からこの私たちの恍惚の本質であったのですが……」彼は愛によって身をもってオルフォイス的世界に離脱しえたのであった。こうした経験のあったその年の十二月二十九日に、リルケはルーに宛てた手紙のなかで犬に対する態度を述べているが、以前にはリルケのほうで犬を理解し、犬のなかに入ろうとしていたのとはちがって、犬のほうでリルケの内部に入ってきて、自分を是認するよう、それが当然の権利でもあるかのように、要求してきている。こうしたことも、リルケが愛による離脱の状態をはっきりと経験し、ついには「このはすばらしい」（Hiersein ist herrlich!）と叫びうるほども生を肯定しうる心的状態に立つことができたからであった。こうしてリルケは

かっては去らしめた犬に祝福さえ与えようとするにいたった。

こうして一九二二年、晩年の大作『ドゥイノの悲歌』が完成され、同時に『オルフォイスへのソネット』が嵐のごとくできあがった。その第一部、第十六歌は犬に捧げられたソネットである——

16. Sonett an Orpheus

Du, mein Freund, bist einsam, weil.....
Wir machen mit Worten und Fingerzeigen
uns allmählich die Welt zu eigen,
vielleicht ihren schwächsten, gefährlichsten Teil.

Wer zeigt mit Fingern auf einen Geruch? —
Doch von den Kräften, die uns bedrohten,
fühlst du viele.....Du kennst die Toten,
und du erschrickst vor dem Zauberspruch.

Sieh, nun heißt es zusammen ertragen
Stückwerk und Teile, als sei es das Ganze.
Dir helfen, wird schwer sein. Vor allem: pflanze

mich nicht in dein Herz. Ich wüchse zu schnell.
Doch *meines* Herrn Hand will ich führen und sagen:

Hier. Das ist Esau in seinem Fell.

友よ、おまえは孤独なのだ、なぜなら……
私たちは　言葉や指示で　この世界をしだいに
わがものとしていくのだが、おそらく　それは
そのもっとも脆弱な　危険な部分であるのだろう。

あの香りを　いったい誰が　　指でさし示すだろう？
だけど　おまえは　私たちを脅ろかす諸力の
おおくの力を感じとり……死者たちと知りあうが、
呪文には　驚いて懼れをいだいてしまうおまえなのだ。

さあ、いまはいっしよに　寄せあつめの部分
を全体でもあるかのように　耐えていかねばならぬのだ。
おまえを援けることは　むつかしいことだろう。ことさら私を

おまえの心に植えつけぬこと、俄かに増大する私なのだから。
けれども私は　**私の**主の手を導いて　こういいたい——
ここにおりますこれは　自分の毛皮を纏うたエサウです、と。

「友よ」と呼びかけるその主は詩人であり、呼びかけられるのは犬[註1]である。しかも「おまえは孤独なのだ」と説明されている。友情と孤独、これは先に引用した一九〇二年二月十二日のパウラ・ベッカー宛の手紙の一節そのままの表現である。詩人（芸術家）は像世界（Hier-sein）に属しながらも、事物世界（Da-sein）への過渡の状態、すなわち孤独（einsam-sein : allein-sein）のなかにある。それは相対存在（gegenüber-sein）と一致存在（einig-sein）の中間的な、実存の Einsamkeit で、詩人の呼びかけはこの Einsamkeit で結ばれる犬への呼びかけである。犬は本来的に動物的存在者として事物世界（Ding-Welt, Da-sein, einig-sein）に属しているものだが、いまは像世界（Bild-Welt, Hier-sein, gegenüber-sein）に迷いこんでいる。しかし犬は事物世界の事象（Ereignis）を感じとる中間的な孤独者である。（ソネットの第一行末の weil という接続詞の接続文は省略されているが、いうまでもなく weil du ein Hund bist ——「おまえは犬なのだから」——と補うべきである。

註1　このソネットのなかでリルケが犬という語を使っていないのは、リルケの犬に対する思いやりからである——「ソネット第十六は犬によせてつくられたものだ。私はそれを気づかせたくなかった。犬がそっくり全体（ガンツェス）のなかに取りいれられるようにしたかったからなのだ。ちょっとでも指示したら、犬はまた孤立させられ、分離させられてしまうだろうからね。（それで、犬はいっしょに下のほうをずっと歩くのだ、所属しながら注意されながら、ちょうどレムブラントの夜警のなかの犬と子供のように）」（クララ宛、一九二三年四月二十三日）

しかしわれわれは allein-sein のなんたるかを知らず、意識的に、さらには意識的対象化（相対化）をおしすすめて gegenüber-sein のうちにあり、指示したり、言葉で表現したりしうるいわば具体的な眼の世界（Augen-Welt）を、すなわち「眼にみうるもの」（Sichtbares）のみを獲得している。意識の下層部、内面空間、すなわち事物世界の「眼にみえざる」（unsichtbar）存在者は忘却されて、通常の意識で把握される「そのもっとも脆弱な、危険な部分」、時の流れによって移ろいいく部分だけが世界とされ、獲得されている。

われわれの世界は「眼にみうるもの」として、眼によって捉えられうる眼の世界とされている。たとえば香りを指示し、眼でとらえうるであろうか、また香りを日常の言葉で表現しうるであろうか。香りはただ詩人の言葉、存在を開き、存在を護り、「山上の懸崖から獲得された純粋な言葉」（『第九悲歌』）「存在の家」（ハイデッガー）である言葉によってのみいわれうるのだ。日常の言葉は、ただ世界の「脆弱な危険な部分」だけしか表現できない。詩人は、詩人の言葉をもって、香りを内面の事物世界（開けた世界）にいっそう

「眼にみえざるもの」として、ふたたび立ちあがらせる。詩人は事物世界に通じ、Da-sein に触れうるからである。詩人は意識的に対象化（相対化）をしない。動物もまた対象化（相対化）をしない。動物は世界を嗅覚（Geruchsinn）で感じとる、従って動物の世界は意識的な眼の世界（Augen-Welt, Welt aus Blicken）ではなく、Geruch-Welt である。その世界に生きる動物は、眼にみえない自然の隠された諸力を感じとっている。また死から解放されているがゆえに、死に対する不安をもつことのない動物は死者とも交わることができる。動物は死者たちの滞在場所である（意識のピラミッドの下層部）事物世界にあって、あらゆる存在者と一致（einig）の状態にある。ただ犬だけが本来はそこを故郷としていながらも人間世界（像世界）の gegenüber の状態に迷いこんでしまった、しかし犬は「開けた世界」との交通の可能性を備えている。それゆえに犬は「開けた世界」に守られうる状態にある、しかし人間は「開けた界世」からの離反の gegenüber の状態にあるがゆえに「開けた世界」に守られていない、それゆえに隠された諸力に脅かされるのである。それに対して人間は神祕に通じる呪文を唱えて回避を企てる。しかし犬はその呪文によって、かえって「開けた世界」との交通の阻まれることを恐れるのである。

われわれの像世界は意識的相対化によってばらばらの部分となった。例えば、生と死の分離、神と人間の分裂、善と悪、美と醜の相対的関連など。この眼にみえる部分を「眼にみえず」ふたたび内面に立ちあがらせることによって、部分は相対性を失い、einig-sein の状態におかれ、「全き世界」（das Ganze 全体）となる。その際に要求されるのは孤独（allein-sein）であって、その孤独に耐えることが必要とされる。意識的相対化の像世界においては、たとえ詩人が孤独を守ろうとも、像世界に迷いこんだ犬が gegenüber-sein の状態で詩人を捉えるならば、孤独を守りきれず、ついにはふたたび意識的に、さらには意志的になり、犬の主にまで増大してしまうだろう。詩人とはいえ孤独を守ることの困難さゆえに、犬を犬本来の故郷に戻し、そこに世界をもたせることによって、犬を救済することは困難なことであろう。詩人は像世界をいうだけ、歌うだけであり、そのことによって像世界は Da-sein との係わりをえて、眼にみえざる内面の事物世界として蘇生する。こうして gegenüber の世界ではなく、einig の世界が、すなわち「全き世界」（das Ganze）がそこに現前（sich präsentieren）する。要するに、かく現前せしめることが詩人の使命であり、結果的には救済に及ぶであろうが、使命そのものには救済はふくまれていない。もともとリルケの世界においては、救済そのものは成立しない。いまはオルフォイスの祝福

に与かることによって、相続財産が、しかし事物世界において犬に与えられることが必要なのである。

生者と死者の両界を自由に往来し、動物も樹木もその歌（Gesang）に耳傾けたという詩人オルフォイス、その歌が存在を開く（"Gesang ist Dasein"）というオルフォイス、そのオルフォイスの祝福が、いまや犬には必要なのである、なぜなら「これは自分の毛皮を纏うたエサウ」であるからなのだ。

しかし現在この一句に関して、エサウをヤコブと見なす解釈が通用しているが、これには批判の余地がある。このソネットには註がついている。しかしそれは直接このソネットにリルケ自身がつけた註ではなく、編纂者エルンスト・ツィン（Ernst Zinn）が、リルケの二通の手紙[註1]から、リルケの個人的註釈を抜きとって、それを註としたものである。さらにツィンはその註に創世記二十七章[註2]を指摘し、とくにこのエサウは毛皮を纏うたヤコブであると記している。[註3]後にジッツオー宛のリルケ書簡を編集したインゲボルク・シュナック（Ingeborg Schnck）もツィンの註を受けついで、ヤコブたるとこを指摘している。[註4]その理由は書かれていない。

註1　この二通の手紙とは、妻クララ宛の一九二三年四月二十三日付のものと、ジッツオー（Sizzo）伯爵夫人宛の一九二三年六月一日付のものとであるが、現在そこに付けられている註は、後者宛の手紙の一節そのままのものである――"In dem Gedicht an den Hund ist unter 'meines Herrn Hand' die Hand des Gottes gemeint; hier des "Orpheus". Der Dichter will diese Hand führen,daß sie auch, um seiner unendlichen Teilnehmung und Hingabe willen, den Hund segne, der, fast wie Esau, sein Fell auch nur umgetan hat, um in seinem Herzen einer, ihm nicht zukommenden Erbschaft: des ganzen Menschlichen mit Not und Glück, teilhaft zu werden."　クララ宛の手紙からの註は、このソネットがオルフォイスに関係のあることを指摘しているだけで、とくに問題とはならない。

註2　アブラハムの子イサクと妻リベカの間に双子が生まれた――エサウとヤコブである。イサクはエサウを愛し、リベカはヤコブを愛した。イサクは年老いたとき、長子エサウに祝福を与えようとして、エサウにその旨を告げた。これを聞き知ったリベカはヤコブにその祝福が与えられんことを望み、子山羊の毛皮をヤコブに着せて、イサクの許にゆかせた。（イサクは老齢のために、その眼がかすみ、両者の区別ができなかった。しかしエサウは生まれつき毛深かったので、イサクは手探りで両者の区別ができたのである）毛皮を身につけたヤコブが現れたとき、イサクは手探りでエサウと思いこんでしまった。つまりヤコブは子山羊の毛皮でイサクを欺いて、ついに祝福を兄エサウから奪ってしまった（創世記二十五章十九節――二十七章四十六節）

註3　リルケ書簡選集の第二巻で初めて、ジッツオー宛のこの手紙が公にされたが、その註としてエサウとヤコブをいれかえて考えるよう指示している（Rilke: Briefe II. S. 586, Insel-Verlag 1950）

註4　ジッツオー宛の書簡集の八十八頁。おそらく編集者が、前註のツィンの考えをそのまま無批判に記したのだろう。

ツィンの編集で付されている、この『ソネット』への註はこうである――「ここでは詩人の主とみなされるオルフォイスとの関係が『私の主の手』のもとで、ふたたび結ばれます。犬の無限なる関与と献身のために、その手が犬を祝福するよう、詩人はその手を導いていこうとする。自分のものとはならない相続財産（Erbschaft）すなわち憂苦も幸福も、人間的な一切を自分の心（Herz）において分前として貰えるようにと、犬はまるでエサウとおなじように自分の毛皮を事実また纏うていたのです」「無限なる関与と献身」――その関与と献身の対象はなにか？　『ソネット』の権威ある解釈者ヘルマン・メールヒェン[註1]（Hermann Mörchen）はこの「関与」には触れず、リルケの一九〇六年四月二十六日付の手紙を引用して、犬が人間たる主人を誇りとしているところから「人間という犬の主人」に献身するよう解釈している。ここでまず問題になるのは、この um……willen という前置詞を、行為の目的とするか行為の動機（原因・理由）とするかである。目的と解する場合、人間（詩人）に、または人間的一切の世界に献身するためには、なんの祝福もいらない。原因・理由と解する場合、すなわち人間的一切の世界に献身しているから、いい換えば現実回避をしていないから、祝福が要求されるのだということになり、これは認容される。しかしこの際における「犬は人間たる主人を誇りとしている」という理由づけは意味がない。現実回避を否定することがなによりも祝福をうける前提条件で、この条件たる「無限に関与し献身する」ことが祝福を受ける原因・理由となるのである。従ってこの地上の現実に「無限に関与し、献身しているのだから」と解釈すべきである。しかしまだそれだけでは祝福はえられない、前提条件をみたしたにすぎないからである。そこで孤独が要求される。孤独は『ソネット』のなかの「自分を植えつけぬこと」「耐えること」で表現されているが、この孤独においてのみ祝福が与えられるのであって、かくして地上の現実は事物世界において把握されることになる。こうみればまた、やがては事物世界に無限に「関与し献身するために」と解釈することができる。こう解釈することによってこそオルフォイス的世界との結びつきが可能となる。

註1　Hermann Mörchen: Rilkes Sonette an Orpheus, W. Kohlhammer Verlag 1958; s. 146 ff

さてエサウとヤコブの問題であるが、例の註では「まるでエサウとおなじように自分の毛皮を……」となっているにも拘らず、ツィンは『ソネット』のなかのエサウを「毛皮を纏うたヤコブ」としているし、またメールヒェンはリルケの書き違いであるとしている。

ここの解釈は複雑になる――なるほどヤコブは毛皮を纏っていた、しかしそれは子山羊の毛皮であった。一方エサウは動物の毛皮のように毛深かった。メールヒェンはこの毛皮は問題にしなくてよい、といっているが、『ソネット』では「自分の毛皮を纏うたエサウ」となっており、この「自分の毛皮」ということに注意すべきである。これはイサクを欺くために身に纏うた子山羊の毛皮ではなく、毛深いエサウとおなじように正真正銘の自分の毛皮を身に纏うている犬、けっして欺きで祝福をえようというのではない犬であることを強調しているものとみてよいだろう。（もしこれに反対するなら、犬は欺きのための子山羊の毛皮を纏うたヤコブということになる）また詩人は本当に祝福をうくべき犬であることをオルフォイスに告げようとしているものと解すべきであろう。メールヒェンは、創世記のエサウは祝福をえなかったからといって、いまさら欺かれたエサウの復権を云々することは邪道である、といっているが、それは当然である。この考えは、ヤコブの欺き（実は母リベカによるものだが）を「敬虔な欺き」(pia Fraus : frommer Betrug)とし、この欺きには少しも道徳的恥辱はないとごく簡単に片付けていることに由来している。しかしそれがたとえ神話的世界の出来事であるにしても、身震いするほど驚いたイサクや、ヤコブを殺そうとまで憎しみに燃えたエサウのことを考えると、そう簡単には片付けられないだろう。またオルフォイス的世界を考えるとき、これほどの欺きをおこなったヤコブがオルフォイスの祝福をえられる資格をもっているとは考えられない。この祝福をうるためには、また開けた事物世界「言語を絶したこの世界に入りこむためには、どんな詭計も、どんな直接的な努力も用いることはできません」[註1]というリルケは、孤独に耐えることのみを必要としている。これは本来的人間の極度の在り方、すなわち実存に耐えることである。しかしそれは人間にとって、人間が余りにも意識的なるがゆえに、いつも危険のなかにあることを意味している。だがこの危険の究極に祝福の一瞬がある（それがまた救済の一瞬でもある）――この一瞬において世界は開けた事物世界に現前するのであって、それこそ世界を相続財産としてもちうる一瞬なのである。ヤコブは欺きによってこの相続財産を獲得しようとしただけで、耐えることも、またこの一瞬に触れることもしなかった。エサウが耐えたことは創世記に書かれていないが、祝福をうるための誠実な努力は描かれている。それは人間的一切をえようとして人間の意識的世界像に迷いこんでしまった犬の姿である。犬には耐えることが欠けていた。それゆえにリルケは『ソネット』のなかで、耐えることを犬に要請している。この要請を受諾し、実行することによって初めて犬エサウは祝福をうる資格をもつのである。

註1　バラディーヌ・クロソウスカ（Baladine Klossowska）宛書簡より。"Lettres françaises a Merline(1919—1922)" S. 82 (Editions du Seuil, Paris 1950)

さて次には、自分のものにはならない相続財産（一切の地上的・人間的なもの）が問題となるが、これはヤコブが欺きによって手に入れてしまったである。創世記では、この相続財産をめぐってヤコブとエサウの対立を、この『ソネット』に当嵌めてみるならば、人間と犬との対立が考えられ、相続財産は人間によって奪われ、犬には与えられないことになる。しかし『ソネット』はオルフォイス的世界との関連が主要な問題であるから、人間の奪いとった相続財産がオルフォイス的世界関連のうちに人間のものとなっているか否かが問われねばならない。この意味からすれば、相続財産はまだ誰のものにもなっていない。この相続財産を獲得しうるものは、あの開けた事物世界、すなわちオルフォイス的世界に係わりうるものだけである——すなわち、犬である。このことはリルケの「自分の心において」(in seinem Herzen) ——この『ソネット』の註——という言葉ではっきり表現されている。この Herz とは、実は Herzraum ——すなわち、Innenraum で、それは Sein が現にそこに（Da）開かれるところ、開けた世界（das Offene）、事物世界を意味しているが、ここにおいて相続財産は——純粋な関連のうちに——獲得されねばならない。ヤコブ（人間）は欺きによってえた祝福で、相続財産を意識的像世界（Hier-sein）において獲得した。イサクの「祝福は一つしかない」（創世記二十七章三十八節）のであるから、エサウ（犬）にはオルフォイスの祝福によって、相続財産が事物世界（Da-sein）において与えられることのみが残されていることになる。このことは犬エサウの意識的像世界における復権ではない、事物世界における新たな財産相続権の獲得なのである。[註1]

註1　このように『ソネット』のなかのエサウは、けっしてツィンのいうようなヤコブでもなければ、メールヒェンのいうようなリルケの書き違いでもない。ツィンの不十分な研究の結果で付けられた註が現在まで誤り伝えられ、『ソネット』の真の解釈が現在にいたってもなされていない。

このように、かっては犬を去らせることだけにとどまっていた詩人が、ここではあえて主の手によって、犬に祝福を与えるまでになっている——「ここにおりますこれは　自分の毛皮を纏うたエサウです」

これはまた芸術の問題（によって把握された二つの世界 Bild-Welt—Ding-Welt）から、いく多の困難な詩的実存行為を経て、存在の問題（によって把握された二つの世界 Hier-sein—Da-sein）へと歩んだ詩人リルケの道程を示している。（一九六一年　秋）